

終末期を考える

今、わかっていること&医師ができること

すべての終末期患者と家族に必要な医療・ケア

contents

◆ 序 ~2018年, なぜ終末期を考えるのか~	岡村知直
◆ 付録	7 (835)
◆ 略語	8 (836)

第1章 総論：終末期を考える

1 終末期とは何か?	樋口雅也	10 (838)
2 終末期医療はなぜ難しいのか?	岡村知直	18 (846)
3 終末期と Advance Care Planning	相木佐代	27 (855)
4 地域のなかの終末期ケア (終末期医療)	大石 愛	33 (861)
5 終末期をめぐる日本社会の動向	柏木秀行	40 (868)
6 終末期患者は誰が診るべきか?	宇井睦人	45 (873)

コラム

終末期を考えるさまざまな取り組み①

縁起でもない話をもっと身近に, 当たり前「もしバナ」の

ある世界へ 原澤慶太郎, 蔵本浩一, 大川 薫 51 (879)

第2章 疾患別の終末期 わかっていること vs いないこと

1 なぜ疾患別に考えるのか?	木村衣里	54 (882)
2 がんの終末期	神谷浩平	60 (888)
3 心不全の終末期	大森崇史	68 (896)

4	慢性呼吸器疾患の終末期	鈴木隆太, 吉田尚子	77 (905)
5	慢性腎不全の終末期	坂井正弘	84 (912)
6	肝硬変の終末期	官澤洋平	92 (920)
7	神経疾患の終末期	立石貴久	99 (927)
8	認知症の終末期	山口健也	106 (934)
9	膠原病の終末期	六反田 諒	111 (939)
10	精神疾患の終末期	中澤太郎	116 (944)
11	重症下肢虚血の終末期	井上健太郎	122 (950)
12	血液疾患の終末期	牧山純也	130 (958)
13	小児の終末期 ①小児がんの場合	森 尚子	135 (963)
14	小児の終末期 ②非がん疾患の場合	雨宮 馨	141 (969)
15	老 衰	河口謙二郎, 関口健二	147 (975)
16	予期せぬ急死 ~救急外来の現場から	熊城伶己	153 (981)
コラム	終末期を考えるさまざまな取り組み②		
	九州心不全緩和ケア深論プロジェクト	柴田龍宏	158 (986)

第3章 終末期において、できること&やるべきこと

1	終末期の代理意思決定について	田中雅之	162 (990)
2	治療中止のタイミングはいつか? ①総合内科編	小杉俊介	171 (999)
3	治療中止のタイミングはいつか? ②腫瘍内科編	宮本信吾	177 (1005)
4	本当に家に帰れないのか?	橋本法修	182 (1010)
5	終末期の栄養・水分摂取	大屋清文	186 (1014)
6	終末期において嘔吐する問題, その社会的背景を考える	吉武順一	192 (1020)
7	病棟での終末期/看取り	松本弥一郎	197 (1025)
8	在宅での終末期/看取り	藤谷直明	202 (1030)
9	施設での終末期/看取り	工藤仁隆, 吉武順一	207 (1035)
10	死亡診断書について	名越康晴	212 (1040)
11	DNAR指示について	森川 暢	218 (1046)

コラム	終末期を考えるさまざまな取り組み③		
	住民と医療者がともに行う意思決定支援の場 Co-Minkan	横山太郎	224 (1052)

第4章 事例に学ぶ 家族・遺族ケアから医療者のケアまで

- 1 終末期患者の家族ケア, 遺族ケア ①看護師の立場から 宮崎万友子 228 (1056)
- 2 終末期患者の家族ケア, 遺族ケア ②緩和ケア医の立場から 小杉和博 234 (1062)
- 3 終末期患者, 患者家族とのコミュニケーション 濱口大輔, 湊 真弥 241 (1069)
- 4 終末期医療における多職種連携 湊 真弥 246 (1074)
- 5 終末期医療にかかわる医療者のケア 舛田能生子 252 (1080)
- 6 事例① 症状緩和でうまくいかなかったケース 平塚裕介, 田上恵太 257 (1085)
- 7 事例② 社会的な理由でうまくいかなかったケース 松坂 俊 262 (1090)
- 8 事例③ 倫理的な対立が生まれたケース 小田浩之 270 (1098)
- 9 事例④ 治療継続か中断か悩み, 結果的に後悔が残ったケース 齋藤亜由美 275 (1103)

コラム 終末期を考えるさまざまな取り組み④

- 緩和ケアという言葉を使わずに緩和ケアをする 西 智弘 281 (1109)

◆ 索引 283 (1111)

◆ 執筆者一覧 286 (1114)

謹告

本書に記載されている診断法・治療法に関しては、発行時点における最新の情報に基づき、正確を期するよう、著者ならびに出版社はそれぞれ最善の努力を払っております。しかし、医学、医療の進歩により、記載された内容が正確かつ完全ではなくなる場合がございます。

したがって、実際の診断法・治療法で、熟知していない、あるいは汎用されていない新薬をはじめとする医薬品の使用、検査の実施および判読にあたっては、まず医薬品添付文書や機器および試薬の説明書で確認され、また診療技術に関しては十分考慮されたうえで、常に細心の注意を払われるようお願いいたします。

本書記載の診断法・治療法・医薬品・検査法・疾患への適応などが、その後の医学研究ならびに医療の進歩により本書発行後に変更された場合、その診断法・治療法・医薬品・検査法・疾患への適応などによる不測の事故に対して、著者ならびに出版社はその責を負いかねますのでご了承ください。